

大学院ニュースレター

久留米大学大学院医学研究科

第71号 / 2014年6月17日発行

編集 / 医学研究科長

目は心の窓、目は口ほどにものを言う (1592)

久留米大学高次脳疾患研究所

教授 森田 喜一郎

「目は心の窓」、「目は口ほどにものを言う」など、『目＝瞳』と心を結びつける言葉は数多くあります。私は、久留米大学で、多くの精神障害や認知症、頭部外傷後等による高次脳機能障害の患者様と関わっております。そしてその関わりを通して、これらの方々に対し、大きな親しみと深い感銘を抱くようになってきました。これらの方々、あるがままに病気と闘いながら、いかに正直で、日々の生活を送っておられることか。そんな患者様のことを少しでも理解しようと、私はいつも患者様の『目＝瞳』を、その輝きを見てきました。そして認知症の人の、赤ちゃんみたいな瞳に驚き、統合失調症の人の瞳の可愛さ、美しさには感激さえしました。また、『目＝瞳』が不安と恐怖の世界では、多くのものを切実に訴えていることにも気づかされました。まさに『目＝瞳は心の窓』と言われるように、患者様が、深い心の奥の、なんとも言えない恐怖の狭間に落ちていく体験、何も分らず死の恐怖に直面したりする体験をした時、患者様の『瞳』は、美しく、哀れで、これぞ『人間だ!』と言わんばかりに訴えてきます。しかし、この体験が患者様自身では、判らないのが、これらの疾患の特性であり、だからこそ私達医師は、的確に判断・受容し、対処しなければならぬのです。このような経験を通し、私は『瞳の輝き』、簡単に言えば『目』の研究に取り組むようになり、気がつけば、30年が過ぎようとしています。そして最近になりようやく、『瞳のユラ

ギ(揺らぎ):波』が大切なのではないか、という結論に至るようになりました。

人の瞳は、常に外界からの対人的な刺激(特に情動)によって、揺いでいるようです。人は、常に対人場面において無意識に『瞳』を揺るがせながら心身を健全に保っているようです。しかし、高次脳機能障害者では、『不安・緊張状態(何か襲ってくる。どうなっているのか)』の、高いレベルの揺らぎの無い瞳と、『恐怖状態(深い深い海の底へ。そして自分が自分で無くなる)』という、低いレベル(不安・緊張とは逆方向)の揺らぎの無い瞳が目立ってきます。この、レベルの高低と『瞳のユラギの無さ』が、対人関係において違和感・奇異感を生じさせ、対人関係困難を生み出すと考えられます。事実、統合失調症者、認知症者でも、対人関係的『瞳のユラギ』は障害され、その揺らぎは無くなります。

健康な人は、高いレベルの不安・緊張した『瞳』と低いレベルの恐怖した『瞳』を消し去るため、『楽しみ:喜び』という陽性情動と『悲しみ:苦しみ』という陰性情動を刹那的消火剤として用い、『瞳のユラギ』を保ち続けます。この、『瞳のユラギ』こそ、健康で自然な人たる由縁であり、対人関係において、アイコンタクトが生じえる由縁ではないのでしょうか。私は、統合失調症を始めとする精神障害、更には、昨今大きな社会問題となっている高次脳機能障害、の方々に、健康な『瞳のユラギ』を育成してゆくことをライフワークとしていきたいと思っています。

おしまい。

『瞳の輝き』は、その人の心の反映であり、対人関係で最も大切なことです。健康な人も、高いレベルの「不安・緊張」と低いレベルの「恐怖・悲しみ」で『瞳は、鎮静し、停まります』。しかし、「楽しみ・喜び」を感じることで、瞳は輝き、数多くのを広く見るようになり、そして『瞳のユラギ』を取り戻します。

以下に、健康な『瞳の揺らぎ』を維持するため、私の三つの心得を提案いたします。

1：目は大切にしましょう

(コンピュータ、スマホはしすぎない!)

2：喜びの瞳を心がけましょう(1日1回は大声で笑い、広く視ましょう)。

3：泣くときはしっかり泣きましょう(涙目の後には、必ず瞳は輝きます。泣くことは健康な証拠です。感動ドラマを!)



『第23回医学教育ワークショップ開催決定!』

本学医学部ではこれまで二年に一度『医学教育ワークショップ』を開催し、現在の医学教育を見つめ直し、将来に向けた新しい教育の在り方について鋭意検討を重ねてまいりました。

第19回医学教育ワークショップより発足した「大学院部会」ですが、今回は、大学院評価をうけて、研究指導と学位授与について討議する予定です。

～「大学院部会」の概要は以下のとおりです～

【日 時】平成26年8月1日(金)～8月2日(土)

【場 所】久留米大学 旭町 教育1号館

【大学院部会テーマ】

「大学院評価をうけて：研究指導の向上と学位授与のアップデート」

【討議内容】

- (1) 学位授与方針の明示
- (2) 研究指導計画の具体化
- (3) 学位論文審査基準の策定
- (4) 大学院満期退学者への「課程博士」学位授与の見直し 等

現在、この大学院部会の参加者を募集しております。参加ご希望の方は6月20(金)までに医学部事務部教務課までお問い合わせください。

事務通信



◆博士課程の皆様へ◆

平成26年度 博士課程共通科目レポート提出期限について

博士課程共通科目を履修された方、前期レポートの提出期限が迫っています。
提出先・レポート課題をご確認のうえ、所定の期日までにご提出ください。



「遺伝子多型 (SNPs)」レポート

(科目責任者：神田教授)

課題：Genome Wide Association Study
(GWAS)について

書式及び量：A4 2～3枚

提出期限：6月30日(月) 17時

提出先：医学部事務部教務課窓口

「ゲノム創薬の進歩」レポート

(科目責任者：児島教授)

課題：1題

書式及び量：A4 4～5枚以内

提出期限：7月31日(木) 17時

提出先：医学部事務部教務課窓口

「臨床・基礎研究と生命倫理 (コンサルテーション)」レポート

(科目責任者：堀教授)

課題：4題

提出期限：7月31日(木) 18時

提出先：小児科医局(担当：村上氏)

「免疫関連分子とT細胞抗原レセプター 多様性の解明

(科目責任者：山田教授)

課題：A4 2枚

提出期限：9月26日(金)

提出先：医局(担当：安村)

*

◆健康診断未受診者の方へ◆

医学部B棟1階保健室にて実施しておりました健康診断はお済みでしょうか？

やむを得ない理由で受診できなかった場合は、これに代わる証明書を
必ず保健室(健康・スポーツ科学センター旭町分室)へ提出してください。

特に、働きながら大学院に来ている社会人入学の方は、職場で健康診断が
行われていますので、その結果のコピーを保健室までご提出下さい。

提出期限：6月30日(月)



◆現住所調査票未提出の方へ◆

修士課程・博士課程全大学院生の皆様へ「現住所調査票」を配布しております。未提出
の方は、6月30日(月)までに医学部事務部教務課へご送付ください。ご協力よろしくお
願いします。※以後現住所の変更がある場合は「学生現住所変更届」の提出が必要です(大

学院 HP よりダウンロード可)。

平成26年度 大学院セミナーシリーズ(特別講義) カリキュラム(前期)のお知らせ

担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
薬理学	6月27日(金) 17:30~19:00	教育1号館 2階 第1会議室	船越 洋 先生 (旭川医科大学教育研究推進セ ンター・センター長・教授)	トリプトファン代謝と高次 脳機能
内科学 (呼吸器・神経・ 膠原病内科部門)	7月3日(木) 17:00~18:30	教育1号館 5階 1501教室	三宅 幸子 先生 (順天堂大学医学部 免疫学講座・教授)	自然リンパ球 と自己免疫
先端癌治療研究所 センター (臨床研究部門)	7月16日(水) 16:00~17:30	教育1号館 5階 1501教室	植村 天受 先生 (近畿大学医学部・教授)	腎がんに対す る分子標的治 療
産婦人科学	7月29日(火) 17:00~18:30	教育1号館 5階 1501教室	加藤 聖子 先生 (九州大学大学院医学研究院 生殖病態生理分野・教授)	婦人科腫瘍の 発生機序と治 療法
外科学 (小児外科部門)	8月21日(木) 18:00~19:30	教育1号館 5階 1501教室	金澤 素 先生 (東北大学大学院医学系 研究科行動医学分野・講師)	機能的消化管 障害における ストレス反応 異常の病態 -消化管運動機能を 中心として-
病理学	9月12日(金) 17:00~18:30	基礎1号館 会議室	宮田 元 先生 (秋田県立脳血管研究センター ・脳神経病理学研究部長)	脳血管障害の 病理
病理学	9月16日(火) 18:00~19:30	基礎1号館 2階会議室	味岡 洋一 先生 (新潟大学大学院医歯学総合 研究科分子・診断病理学分野・ 教授)	大腸癌の 臨床病理(仮)
神経精神医学	9月26日(金) 17:00~18:30	臨床研究棟 2階 共同カンファレンス室	中村 純 先生 (産業医科大学医学部 精神医学教室・教授)	未定

9月までの確定分をお知らせしております。日時・場所等に変更があったものにつきましては、確認でき次第、大学院医学研究科ホームページでお知らせいたします。

また、当該科目履修者は5回以上のセミナー出席およびレポートの提出をお願いいたします。
レポートについては、各セミナー終了後1週間以内に、医学部事務部教務課までご提出下さい。

***** 編集後記

26年度がスタートして早くも3ヶ月が過ぎようとしています。学生生活いかがお過ごしでしょうか。さて、今夏は二年に一度の医学教育ワークショップ開催年です。今後の大学院がどうあるべきか、教授から学生まで大々的に議論する機会には他にありません。皆様のご参加をお待ちしております。(北)

